

すっかり秋になりました。食欲の秋・読書の秋・スポーツの秋・芸術の秋など言われますが、皆さんはどのような秋をお過ごしでしょうか。カスタネット通信10月号では「言語聴覚の日」と「2023年夏の絵本オンラインセミナー」のお話をしたいと思います。

言語聴覚の日



会場の茅ヶ崎市民文化会館

9月10日(日)に神奈川県言語聴覚士会主催イベント「言語聴覚の日 in かながわ」というイベントが開催されました。言語聴覚士は国家資格ですが、その資格に関する「言語聴覚士法」が1997年12月に公布され、翌1998年9月1日に施行されました。そのことを記念し、2007年から、言語聴覚士の職能団体である日本言語聴覚士協会が9月1日を「言語聴覚の日」と定めたそうです。「言語聴覚の日」の前後に行われるイベントは、まだまだ知名度が十分ではない「言語聴覚士の仕事」について地域の方々

に知ってもらい、中学校や高校に広報し、進路の1つの選択肢として考えてもらうといった目的で、行われます。



様々な年代の方が講話を聞いてくれました。

「言語聴覚の日 in かながわ」では、ミニ講話・展示・体験・相談のコーナーが用意されていました。ミニ講話は一般の方に分かりやすく、言語聴覚士の仕事内容をお話するというコーナーです。言語聴覚士について一般的な話があった後、「失語症」「嚥下障害」「聴覚障害」「発達障害」の講話がありました。私は「聴覚障害と言語聴覚士の関わり」と題し、聴覚障害や補聴機器、聴覚障害のある人との接し方についてお話をしました。

会場内では、他施設で働く言語聴覚士と交流することができました。日常は他領域を専門にしている言語聴覚士から「聴覚障害に関する勉強会はありますか?」と聞かれることが何度もありました。現状、聴覚障害領域に関わる言語聴覚士の数は多くありません。しかし、聴覚障害と認知症の関連性についての報告が多く聞かれること、超高齢社会である日本では高齢期難聴の方が増えていることから、他領域を専門としている言語聴覚士も聞こえや難聴、補聴器に関しての知識を得ることが必要とされているのではないかと考えました。



←難聴体験

展示コーナーでは講話の内容に合わせて、嚥下調整食、補聴器などが紹介されていました。嚥下調整食はいくつかサンプルをいただいたので、体調不良の時の水分・栄養補給に試してみたいと思います。体験コーナーでは、ヘッドホンを使った難聴体験をしながら、音声認識アプリ・デバイスを紹介してもらいました。実際使ってみて、皆さんにお伝えできればよいと考えています。

今回初めて言語聴覚の日のイベントに参加しましたが、来場者の方々に言語聴覚士について興味を持ってもらえたら良いなと思いました。



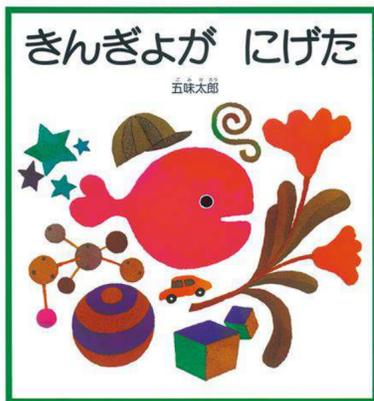
フラダンス体験では『花は咲く』を踊りました。手の動きと表情で思いを表現するところは手話と似ていますね。

絵本オンラインセミナー

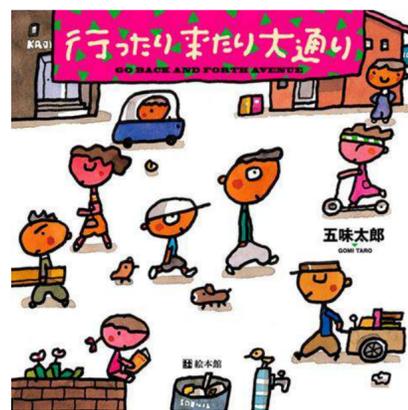


待合室の人気コーナー「オギジビ文庫」の選書をしてくださる絵本マスターにご紹介いただき、「福音館書店2023夏のオンラインセミナー」を視聴しました。セミナーは3部構成で、その第1部が絵本作家、五味太郎さんの「じぶんが見えない!? - 絵本を描いて50年、おいに語る」でした。五味太郎さんの絵本はオギジビ文庫だけでなく、ST室にも何冊か置いてあります。そこでカスタネット通信10月号では、五味太郎さんのお話を聞いて考えたことを書きたいと思います。

動画の中で、五味さんは「即今の人」と言われたと話していました。「即今」ということばを私は知らなかったのですが、禅宗の「即今・当処・自己」という教えで、「いま、ここで、わたしが生きる」という意味だそうです。大事なものは「即ち今」で、「今」にしか興味がない五味さんは絵本で「今」を表現しているから、「今」にしか興味がない子どもは五味さんの絵本に夢中になるのだろうとのことでした。五味さんは「将来、社会に順応できるように型にはめること」が主軸となり、先の準備ばかりで「今」が抜けている現在の教育に批判的です。「今」つまり「自分」を生きている子どもがそんなに一律になるわけがない、安定していると次にいけないので不安定な不安を楽しむのだと語っていました。絵本『きんぎょが にげた』は“もうにげないよ”で終わっていますが、五味さんは実は“やっぱり逃げる”と考えているそうです。このお話を聞いて、不安定な不安を楽しむということが腑に落ちました。



また、「かがくのとも」は科学的なアプローチについて客観的にモノを見ている、「こどものとも」はやや主観的というお話がありました。五味さんは主観と客観が行ったり来たりするのがおもしろくて、主観的客観性を持ち続けているとのことでした。先ほどの「即今」とも関わってくると思うのですが、例えば食事の場面で、子どもは“美味しいご飯を食べている(主観)”と感じ、周りは“食べることでよい体になる(客観)”と考えるといったことのようにです。そこで思い出したのが、“この絵本とくにストーリーはないんだってさ”ということばで始まる『行ったり来たり大通り』です(福音館書店出版ではないのですが)。風船を配っている人、トイレを探している人、ベンチで休憩している人、まさに「即今・当処・自己」であり主観的に生きる人がたくさん出てきます。その人たちに客観的に関わる登場人物や、大通りを俯瞰的に客観視する私たち読者もいておもしろいなあと思った絵本です。

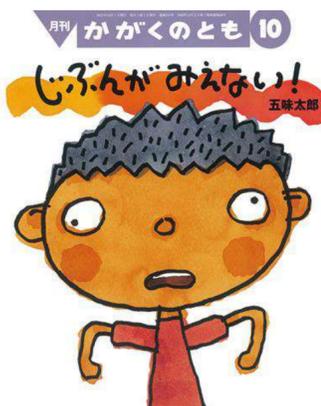


五味さんのお話はところどころ難しく、十分理解できていない部分もあったのですが、考えを巡らせるのが好き、装丁を考えるのも楽しいなど、絵本作りに取り組む五味さんの姿勢を知ることができるセミナーでした。

みんなうち



開園前の動物を見に行ったら、掃除前だったのでうちがいっぱいあった。湯気が出ていて面白かった。「食べるからうちが出る」当たり前じゃん!と思った。



自分が見えないのは“やばい”と70年間も考えていた。気になることを追い求めている感じ。

↑ セミナーで話題に上がった絵本の一部。絵本のとなりの文は五味さんのことばです。絵本を作っている時に五味さんが思ったこと、感じたことも主観的客観性なのではないでしょうか。オギジビ文庫にあります。

